

# 鐘

小川未明

青空文庫



ケーまち  
 K町は、昔から鉄工場のあるところとして、知られてい  
 ました。町には、金持ちが、たくさん住んでいました。西の方を  
 みると、高い山が重なり合つて、その頂を雲に没していました。  
 そして、よほど、天気の良い日でもなければ、連なる山のすがた  
 を見つくすことができなかったのであります。

その山おくにも、人間の生活が、いとなまれていました。  
 ひとりの背の高い、かみのぼうぼうとした、目ばかり光る、色の  
 黒い男が、夏のさかりに、大きな炭俵をおつて、このけわし  
 い山道を歩いて、町へ売りにきました。じぶんが木をきり、そ  
 してたいて製造したものを、売りに出て、その金で、食べ物や、

着る物を買つて、ふたたび山へはいるにちがいありません。それは、いくらかせいでも、しれたものです。これだけで、人間が、一年じゅうの生活をすると考えると、ひとつの炭俵にも、命がけのしんけんなものであるはずでありました。

ある夏のこと、男は、汗をたらして、重い炭だわらを二つずつおつて、山をくだり、これを町のある素封家の倉へおさめました。この家は、けちんぼということで、町でもだれ知らぬはなかつたのです。そのおさめ終わつた日に、男は代金をせいきゆうしますと、おさめた俵数より、二俵少なく、これしかうけとらぬから、それだけの代金しかはらえないというのでした。「そんなはずはない、十俵いれました。」と、男は庭さきにつつ

たつて、いいました。

「八俵びょうしか、いれてない。そんないいがかりをつけるなら、倉くらにはいつてかぞえてみるがいい。」と、主人しゅじんは、いたけだかになりました。

男おとこは、山やまを五たび下くだつて、またのぼったきおくがあります。それで倉くらにいつて、数かずをかぞえてみると十いたれたものが、八つしかなかった。かれの顔かおは、土色つちいろとなりました。しかたなく、八俵びょうの代だい金きんをふるえる手てで、うけとると、おそろしい顔かおをして、このいかめしい門もんのある家いえをみかえつて出でていきました。

男おとこは丘おかの上うへに立たつて、K町ケーまちを見みおろしながら、

「死しんでも、忘わすれやしねえぞ。」といった。

そのとき、少年しょうねんは、かれのみすぼらしい、いかりにおのいた姿すがたをみたのです。目の下したに、林はやしのごとく立たった、えんとつからは、黒くろいけむりが、青あおい空そらにのぼっていました。

その後ご、だれの口くちからともなく、うわさにのぼった、金持かねもちが、山男やまおとこの炭代すみだいをごまかしたというのをきいたとき、少年しょうねん

は、ある日ひ、けっして、男おとこは、気きがくるつていたのではないのを知しりました。そして、この素封家そほうかの前まえを通とおるたびに、いかめしい門もんをにらんだのであります。

「あのしんだいで、そのうえ、鉄工場てつこうじょうの、利益配当りえきはいつうが、たくさんあるのに、なんで、山男やまおとこの炭すみなんかをごまかすような、けちなことをするのか。」

こういう、人の話をきくときに、少年には、みすぼらしい、

いかりにもえた、山男の姿が、目にみえたのでした。

他国の寺から、大きなぼん鐘をこの町でひきうけたのは、それからのちのことでありました。

「大きなもんだそうだ。他の工場では、どこでもつくり手が  
ないというので、この町へあつらえにきた。なにしろ寄進の金で、  
できるのだそうだから、この町の工場でも、職工にいい  
つけて、念をいれてつくつているということだ。」

こんなことばが、少年の耳にはいったとき、人のまねるこ  
とのできない、どんな芸術品がうまれるだろうと、いろいろ  
の美しい、鐘の形を、そうぞうにえがきました。

それは、ちようど、夏も、やがていこうとするとところであります。

「大きな鐘が、できあがつて、港まで、車に乗せて、引かれていき、そこから船で、あちらへ送られるのだ。」と伝わりました。「町じゆう、たいへんなさわぎだというから、ぜひ、けんぶつにいかなくてはならぬ。」と、村の人たちもいいました。

その日、少年にとつて、昼まへは、いそがしくて出られませんでした。いまごろ、鐘を引く行列が、町を通るであろう。天気があやしくなりました。つめたい風が、ふきだして、木立の葉や、たんぼにうわっている、とうもろこしの葉うらをかえして、



それがなんとなく不安ふあんに、銀ぎんのごとく白しろくきらめいていたのです。

「降ふるかもしれないが、いつてみようかな。」

少しょうねん年は、ちゆうちよしましたが、ついに、灰はい色いろの雲くものせ

わしそうに、頭あたまの上うへを走はしる野原のほらをひととびに走はしつて、町まちへいきま

した。さすがに、両りょうがわに、人ひとは黒くろ山やまのごとく集あつまっています。

人ひとをおしわけて、

「どんな、大おおきい、みごとな鐘かねか？ どんな、形かたちをしているか？」

少しょうねん年は、のぞいてみようとしました。そして、かれは、な

にをみたでしよう？

いく十にん人か、かき色いろの着物きものをきた、囚しゅうじん人が、列れつをなして、

なわにすぎり、それを引ひいていたのです。

「あつ……。」という、おどろきが、少年の口から出ました。もうそれをみる勇氣もなく、しおしおとして、かれは、さつききた道を、村へもどりました。

「なんで、囚人になんか、引かせたのだろう？」と少年は、晩がた町から、見てきた年よりにむかつて、たずねました。

「賃金が、やすいからだろうが、あんなことをさせるのは、むじひだ。」

年よりは、こうかんたんにこたえました。このじぶんから、いよいよ雨がふりでした。

鐘は、船にうつすさいに、すべつて、板をころがると海のなかに落ちてしまったそうです。その話が夜になつてから、町や村を、

びつくりさせました。

落ちた鐘は、海が深く、下に岩が多いために、ありかをさぐつたけれど、わからず、それきりになってしまったが、ふしぎなことは、とうぎ、あらしの日に、海があれば、どこからともしれず、海のなかから鐘の音がきこえたことです。

しかし、それも月日がたつと、鐘の音も、うわさとともに、きえていきました。

ただ、たねだけは、いつか芽が生え、その芽はのびるものです。少年は、大きくなってから、この町の工場に働いて、正義と自由のために、たたかう身となりました。そしてつかれると、かれは、丘にあがった。すると、みすばらしいふうをした山

やまおと

男こが、いかりにおののいて、

「死しんでも、忘わすれやしねえぞ！」とさげんだ、姿すがたが目めにみえて、  
かれをうちのめしました。

また、海かい岸がんに立たって、ぼうぜんとして、ため息いきをつくると、ど  
こからともなく、鐘かねの音ねが、きこえて、すげがさをかぶった、囚し  
人ゆうじんのむれが、くもの子このごとく、なぎさにうごめくまぼろし  
がうかびました。

「よし、たたかうぞ！　なんで忘わすれるものか。」と勇ゆう気きをとりか  
えして、さけぶと、たちまち、あわれな囚しゆうじん人じんたちの姿すがたは、白は  
くちようくちよう鳥とりとなつて、夕ゆうやけのする、空そらに舞まいあがり、ようようとし  
て、つばさがかがやかして、とぶのでした。ただ、鐘かねの音ねばかり

は、しおの色が、くらくなるまで、いつまでも、なりやまなかつたのであります。

——一九三〇・九——



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㄨ」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「童話の社会」

1930（昭和5）年9月

初出：「童話の社会」

1930（昭和5）年9月

※表題は底本では、「鐘《かね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 鐘

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>